

富山医科薬科大学
医学部同窓会報

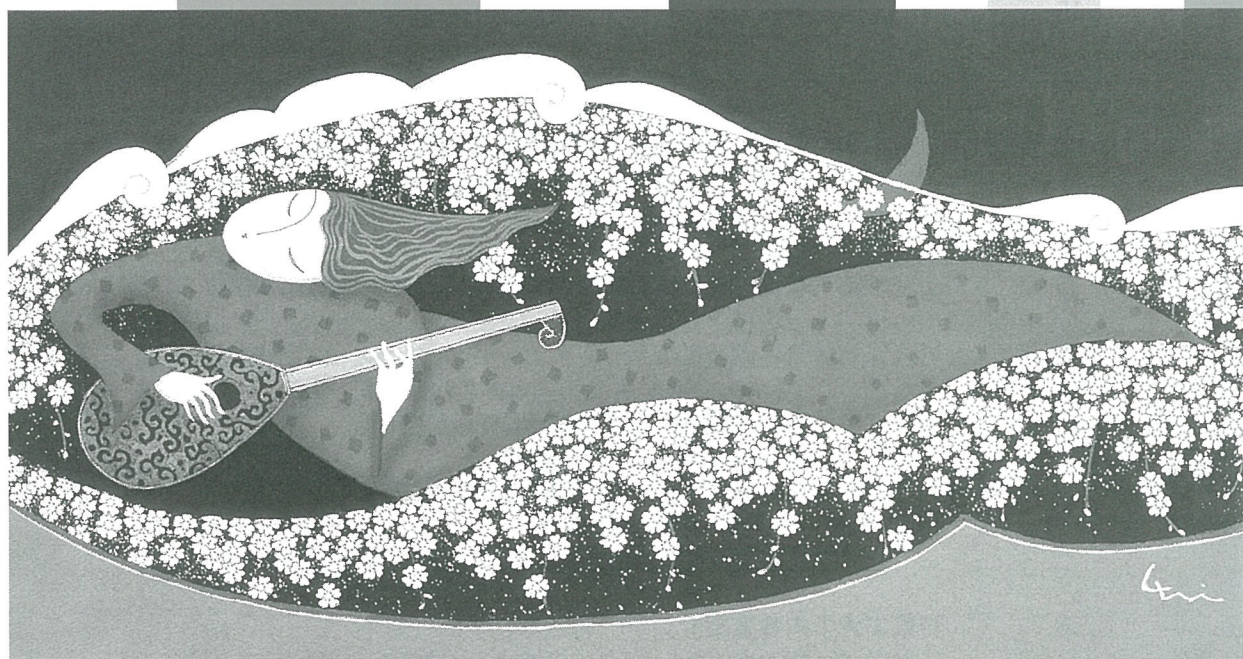
2005. 第14号



富山医科薬科大学

医学部同窓会報

2005. 第14号



C O N T E N T S

4. 国立大学法人 富山医科薬科大学
—法人化と再編・統合— 学長 小野武年
5. 富山医科薬科大学附属病院長となって— 病院長 小林 正
7. ヴァイオリンと私 会長 高田良久
12. 開学30周年記念イベント
富山医科薬科大学医学部同窓会講演会
15. 医療事故のリスクマネジメント
高麗橋総合法律事務所 弁護士・医師 許 功
(医学科 平成6年卒)
21. 宇宙飛行士の健康管理と宇宙医学研究
独立行政法人宇宙航空研究開発機構 主任研究員 大島 博
(医学科 昭和58年卒)
25. 会費の納入状況 理事長 田渕英一
28. 老人保健施設に勤めて5年 名誉教授 小泉富美朝
31. 特集 “卒業生の今現在、そして将来” Part 9.
福田 修 (医 学 科 昭和58年卒)
垣内博成 (医 学 科 昭和62年卒)
西尾陽一 (医 学 科 平成11年卒)
曾根志穂 (看護学科 平成9年卒)
36. 特集：大学内教室紹介
成人看護学（慢性期）講座 若林理恵子（平成15年大学院卒）
システム情動科学（旧第一生理学）
田渕英一（医学科 昭和62年卒）
放射線医学講座 野村邦紀（医学科 平成元年卒）
-

染色工芸家。太平洋美術展・新人賞(1982年)、松吉賞(1984年)、太平洋美術会賞(1998年)受賞。各地工芸画廊をはじめ、日本橋高島屋(東京)、現代工芸藤野屋(栃木県佐野市)などで個展を開催している。また、1994年とちぎの美術女流作家100人展にも選ばれる。1999年銀座松屋にて個展を開く。いずれも好評を博す。栃木[蔵の街]音楽祭協力委員として地域文化活動にも貢献。縁あって本同窓会誌の表紙絵を1997年より依頼している。栃木県岩舟町在住。

43. <定年退官寄稿>
 富山医科薬科大学での28年を振り返って
 成人看護学(Ⅱ)外科系教授 田澤賢次
 退官にあたって 薬理学教授 武田龍司
 光陰矢のごとし 皮膚科学教授 諸橋正昭
50. 杉の子会—金沢編 本 敦文(医学科 昭和57年卒)
51. <訃報>
 吉村卓也君に捧ぐ 和田健太郎(医学科2年)
 卓也くんを偲んで 乾友彦(医学科2年)
 吉村卓也君を偲んで 向井務晃(医学科2年)
- 筒口由美子先生を偲んで 母性看護学 永山くに子
 筒口由美子先生へ 堂本百合子(看護学科4年)
 山本智巳(看護学科4年)
- 孤高の学者そして英語の達人、
 故藤岡基二名誉教授を偲ぶ 旧第二生化学 小川宏文
57. 第56回 北陸地区国立大学体育大会
 第56回 西日本医科学生総合体育大会
58. 平成16年度富山医科薬科大学関連病院長懇談会議事要旨
62. 平成16年度第23回医学部同窓会総会議事録
64. 平成15年度会計報告・平成16年度収支予算案
 平成16年行事報告・平成17年行事予定
66. 職掌分担・評議員一覧
68. 富山医科薬科大学医学部人事消息
69. 編集後記



国立大学法人 富山医科薬科大学 — 法人化と再編・統合 —

学 長 小 野 武 年

医学部同窓会会員の皆様には、ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。また、日頃、医学部発展のために大変お世話になり、厚くお礼申し上げます。

皆様、すでにに御案内のとおり、全国の89国立大学は、昨年(平成16年)4月1日より一斉に法人化され、本学も国立大学法人富山医科薬科大学として新たなスタートを切りました。また、本学、富山大学及び高岡短期大学は本年(平成17年)10月に再編・統合し、新しい大学としての富山大学となる運びとなっております。ここに、法人化並びに再編・統合の概要を報告いたします。

まず、法人化では大学経営が従来の国立大学に比べ、より自由な裁量で行えるようになり、本学のような国内外の他大学には例をみない特色を持つ大学にとりましては、さらに魅力ある大学に変革できるチャンスであると私は捉えています。しかし一方で、この法人化は、現在の厳しい経済的制約の下で大学経営を効率良く行うとともに、大学のより良い迅速な変革を要求されています。そして、この大学経営や変革には、自己責任と世論に対する説明責任が強く求められています。本学の管理運営においても役員会、経営協議会、教育研究評議会の審議を通じて迅速かつ機動的な目標設定と意思決定を行う実行体制を構築し、大学の諸改革に対して柔軟に取り組んでいます。

次に、再編・統合につきましては、本年(平成17年)10月の発足に向けて、今後、法律等の改正や3大学間の諸準備が行われていく段階です。県内3大学の再編・統合は国立大学法人化後の全国で最初のしかも3大学の再編・統合という歴史上類をみない大改革です。再編・統合によりまして、真の意味の総合大学を目指すこととなります。国や社会からも大きな注目を集めており、発足に向けて3大学の教職員が一体となって万全を期していく所存です。

以上、法人化及び再編・統合のほか、先ず研究面では、すでに文部科学省の平成14年採択の21世紀COEプログラム課題「東洋の知に立脚した個の医療の創生」(拠点リーダー：寺澤捷年教授)や知的クラスター事業「とやま医薬バイオクラスター」(研究代表者：村口篤理事)も順調に成果を挙げています。さらに昨年(平成16年)4月より基礎医学と臨床医学からなる中核的大学院教育研究組織として「認知・情動脳科学専攻」の設置も実現しています。折しも多年の地道な努力の成果と先見性のある将来展望が評価され、文部科学省所管 独立行政法人 科学技術振興機構(JST)の戦略的創造研究推進事業のチーム型研究(CREST)に「情動発達とその障害発症機構の解明」(研究代表者：西条寿夫教授)と、個人型研究(さきがけ)にも「極性基が配列した低エントロピー型分子認識アレイの開発」(個人研究者：

阿部肇助手)が採択されたことは同窓会の皆様にも明るいニュースとしてお知らせできました。今後、これらの実績を突破口に、法人化後の大学経営に不可欠な競争的資金の獲得に一層の努力をしなければならぬと思っております。

次に、教育面では、薬学部が平成18年入学生から薬剤師養成6年制に移行し、病院実習も4週から24週になります。薬学部では、この制度改革への対応について検討が重ねられており、薬学部長と私が県内の国公立病院の院長、薬剤部長等に直接お会いし、実習学生の受け入れ、指導等をお願いし、すでに内諾を得ています。また、3大学の再編・統合を視野に入れ、生命科学を中心とした医学・薬学・理工学が融合した新しい大学院構想の実現、これと表裏一体の関係にある感性豊かで高度の知識や技術を身につけた医師、薬剤師、看護師、さらには先端的な研究や教育を担う人材の育成、地域に根ざした世界に誇れる教育や学問を通して、地域・国際貢献にも全力を尽くしています。一方、平成12年に発足した産学官連携によるフォーラム富山「創薬」も13回を数え、さらに飛躍するための戦略を創出する段階にきていると思います。

今後とも医学部同窓会会員の皆様には御指導と御鞭撻を切にお願い申し上げます。



富山医科薬科大学附属病院長となつて—

病院長 小林 正

4月1日から、新しく病院長を勤めさせていただいていますが、以前2年2ヶ月勤めた時と比べ、環境の著しい変化と厳しさを感じ、緊張と大変な覚悟が必要であることを改めて思い知らされました。自主・自律性の考えの下に運営される国立大学法人になると、著しい収入減に対しては国の全面的な補助は無く、独力で問題解決し、経済的にも自分で成り立っていくことが求められます。さらに、現在の日本の経済状態が悪化していることから、国からの交付金も毎年2%ずつ減少し、その分、病院経営も節約と増収を確保しなければ当然、経営はなりたらず、給料も払えなくなります。その上、大学病院は地域医療の責任を果たしながら、高度医療と人材の育成という責務を負っています。

今までの国立大学の附属病院である当病院を見ていると、まだまだ甘えや効率を欠いた経営・運営が全体として感じ取られます。そこで当病院の職員全員にお願いが有ります。今までのような国に頼るような公務員体質を捨て去り、我々の病院を永く最高の状態で存続する為に、また我々自身の生活を維

持する為にも、自らの病院として無駄を省き、効率の良い、民間病院のような患者サービスを行える病院に生まれ変わるべく、一人一人意識改革をこれからして頂きたいとお願いいたします。

どのような病院職員が望ましいかといえば、

- ①エネルギーがあって頑張る人
- ②協調性があって常識のある人
- ③絶えず工夫をして前向きである人

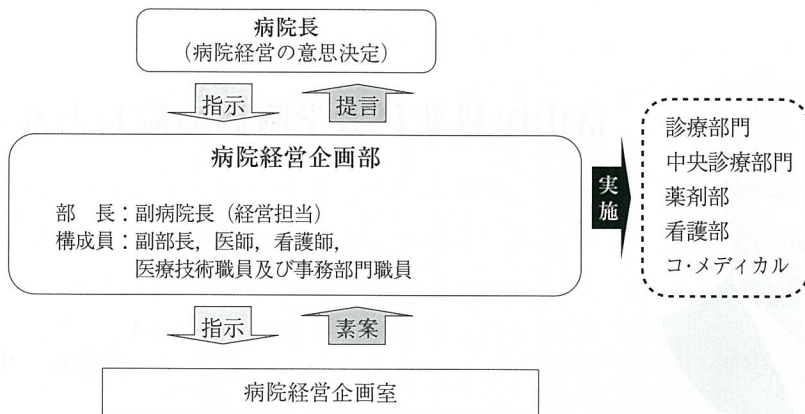
に尽きると思います。もちろん、

- ④患者の側に立った、人間性あふれる人

であること。

当面の目標は、患者様のためにも医療の質を上げて維持すること、無駄な支出はつつしみ節約に励むことでもあります。もちろん、増収を心がけますが、まずは無駄を省くことから始めます。このため、医療材料、薬品などの購入システムを大幅に改善することを計画しています。患者様に来ていただけるから、我々は生活できるのだということを忘れないようにしてください。

病院経営企画部の設置



病院の経営改善を推進するために、斉藤 滋副病院長(経営担当)を部長とする「病院経営企画部」が設置(H16.4.22)されました。

この経営企画部は、病院長の諮問を受け、病院経営に関する次の事項について企画立案を行なうことが任務です。

- ①経営収支改善
- ②診療体制及び人員配置
- ③設備、機器及び施設の配置
- ④その他経営改善・合理化、病院機能向上

また、この経営企画部を支援するため、事務局各課の横断的な組織として、奥田主計課長を室長とする「病院経営企画室」が設立されました。

ヴァイオリンと私

会 長 高 田 良 久

何部に入るか迷いながら高校の校舎を彷徨っていたとき、音にひかれて上がって行くと、音楽室に中学のプラスバンドの先輩市村さんがいた。

「いいところに来た。これやって御覧」

と、徐に手渡されたのがヴァイオリンである。

「変なものをはじめたなあ」

2003年11月に亡くなった父は驚きとも戸惑いともつかぬ調子で言ったものだ。

父は筋金入りの愛鳩家である。医師会も内科学会も平の会員だったが、日本鳩レース協会では顧問を拝命していた。総裁に高松宮様を戴き、代表が会長だからかなり上の方である。会長にという要請もあったそうだが、医者をしてながらできるものではないとついに受けなかった。だが、内心満更でもなかったようで、私がもう少し早く家に入っていれば受けられたのかもしれない。

日本鳩レース協会は上野にある。家内の実家が根津で、食事や買い物に出るのが広小路、不忍池でのボート遊びは五歳になる長女のお気に入りだ。わが家は上野に縁が深い。岳父椿實は、三島由紀夫に絶賛された「人魚紀聞」（河出文庫洪澤龍彦コレクション『暗黒のメルヘン』収載）をものした作家でもあるが、上野を版図とし不忍池を「騒然たる東京に静まる、緑の古宝玉」と讃えた。

ある日、広小路まで上野の山を越えて行けるか、と長男がいうので、池之端から芸大の脇を抜け、意外に入り組んだ道を当てずっぽうに辿っていくと、日本鳩レース協会の建物に行きあたった。午後休診の水曜日や休日など、取りまとめ役の父はよく協会の会合で上京した。

「おじいちゃんはこちらへ来ていたんだ」

不思議な懐かしさに、残された親子はしばらく協会の建物を見上げていた。

愛鳩家の息子がどういうわけかヴァイオリンである。もともと、気分がいいと風呂場で演歌を唸っていた父もそういう意味では好楽家だし、母にも箏曲の嗜みがあるから好楽のDNAは組み込まれているのだろう。

演歌だろうとモーツァルトだろうと、音楽に違いはない。

演歌とモーツァルトといえば、調布のホールでオーケストラ・シンポジオンがモーツァルトの20番の協奏曲を演奏したとき、1楽章のカデンツァにテレサ・テンの「つぐない」のメロディーが出てきて仲間と顔を見合わせたことがある。

ベートーヴェンも愛奏したというこの協奏曲のピアノ・ソロはa'-a"-cis'-e'-d'-d'と始まる。「つぐない」はa'-f"-cis'-e'-e'-d'-d'だから、一音（a"とf"）の違いでしかない。そこに着目したお茶目なカデンツァを作曲したのは、讀賣新聞の演奏会評などを書いている安田和信氏である。

モーツァルト研究者である安田先生、モーツァルトの作品ならほとんどのテーマを暗唱しているようだが、居酒屋かどこかで「つぐない」を耳にした時、忽然とカデンツァの構想「モーツァルトのつぐない」が沸き起こったのかも知れない。

音楽は面白い。

高校でヴァイオリンと出会った私は、大学でもオーケストラをやるぞ、と意気込んでいたのだが、一期生だった私たちの入学時の学生数は医・薬あわせてわずか200名。クラシックファンなる人種は人口

の1%だそうだが、それでは全校で2名の計算だ。楽団はおろか弦楽四重奏にもならない。フィルハーモニー管弦楽団を擁する伝統校に入学できなかったことを悔やんだが後の祭り。そうなれば自分でつくるしかない。2年目になって学生が増えると奇様な人も増え、昭和52年（1977）6月、念願の楽団創設となった。

ネビル・マリナー率いるアカデミー・オブ・セント＝マーチン・イン・ザ・フィールズという室内楽団が弦楽11名で鮮やかなヴィヴァルディの「四季」や「調和の靈感」を聴かせ、魅せられていた頃だ。小所帯で管弦楽団を名乗って、気が付いたらヴァイオリン、トランペット、トロンボーン、コントラバスしかいなかった栃木高校の轍は踏みたくない。基盤となる弦楽合奏をしっかりとさせよう。だが「弦楽合奏団」として管楽器を除くのももったいない。それで富山医科薬科大学室内合奏団と名乗ることにした。

ところが楽器がない。学校はそう易々と買ってはくれない。仕方がないので親を拝み倒して無利子無担保長期返済という都合のいい借金をしてヴァイオリン2丁、ヴィオラ・チェロ各1丁を最低価格で買い揃え、放課後の校舎にキーキーガリガリという妙音（妙な音？いえ、妙な音）が響くようになった。

創団の年の夏、帰省した私は高校の友人太田君にばったり出会った。太田君は東京の大学に進学してオーケストラに入っていた。楽団をつくったのなら指導者がいるだろう、竹澤勤先生を紹介する、竹澤先生は長いヴァイオリン歴を有し、ひよっとすると指導もしてくれるかも知れないから一緒に遊びに行こう、と言う。

室内合奏団を旗揚げしたものの指導者がいるわけでもなく、いつまでたっても妙な音では、だんだんやる気も失せてくる。渡りに舟、と太田君とともに小山市の先生宅を訪れることにした。

どんな楽団にしたいかという問いに、

「モーツァルトをうまく弾きたい」

今思えば恐いもの知らずの答をしたものだ。しかし先生は「志やよし」と遠方までの指導をご快諾くださり、昭和53年（1978）1月、大雪の中、富山市内の青年の家で行われたはじめての合宿から、遠路指導においていただくこととなった。まだ上越新幹線もない頃で、寝台急行「能登」で往復されたこともある。

先生は基礎の大切さを繰り返しご指導下さり、それは今も財産になっている。

先生の熱意と団員の努力とで、同年10月1日には校内の大講義室で第1回定期演奏会を開催する。初めて楽器を手にして6ヶ月ほどの1年生を含む我々の1年にも満たぬ練習の結果だから、口の悪い友人から“Choito hidoine Nichtmusik”などと散々にからかわれたが、それでもモーツァルトの“Eine kleine Nachtmusik”全4楽章を弾き終えた気分はなかなか爽快だった。

引退の年1981年には竹澤先生の尽力で讀賣日本交響楽団の先生方にご来演いただき、よく通ったレコード屋Dick33の横井氏の助言も得て、モーツァルトのお師匠さんともいべきJ.C.バッハのシンフォニア作品18-2、フンメルの序奏とテーマと変奏、そしてモーツァルトの交響曲第40番という大演奏会を開催するに至る。

富山時代でもう一つ忘れられないのは、1986年11月、現在浜松で皮膚科をやっている田中正人君や旧姓塚田真子さん、製薬メーカーに就職した吉仲孝仁君らとともに富山医科薬科大学混声合唱団創団十周年記念演奏会を行ったことだ。記念ということで大きな企画になった。アカペラで中世ルネサンス世俗曲、器楽でヘンデルのトリオ・ソナタ作品2-3、トリオは3人の声楽ソロとソロ・ヴァイオリンを含む管弦楽、そして合唱という小規模校にとっては大規模な曲、J.S.バッハのカンタータ140番「目覚めよと呼ぶ声がする」全曲演奏というプログラムである。

管弦楽は、当時東京芸大生だった竹澤先生のお嬢様のご尽力で、同大を中心とする特別編成。不肖私も第2ヴァイオリンの末席を汚させていただいた。

自分の下宿を作業場にして、昼間は大学院の実験、夜は団員と当日配布するパンフレットの原稿書きやレイアウト、と文字通り不眠不休の数日もあった。女子団員の思いがけないお握りの差し入れが嬉しく美味しかったことを思い出す。

演奏面でも資金面でもかなりの冒険だったが、団員の頑張りや顧問はじめ諸先生方のご協力で成し遂げることができた。

この時ソロ・ヴァイオリンを担当されたのが沼田園子さんである。いつしか疎遠になっていたのだが、吉田秀和氏が朝日新聞「音楽展望」（1998年11月）で絶賛されたのをきっかけに再び交流が始まり、富山の演奏会から16年を経た2002年7月、わが下野楽遊の1周年を祝う演奏会にご来演いただくことができた。

音楽の縁とは不思議なものである。

平成7年（1995）栃木に戻ってから2000年頃までは現在の音楽愛好を彩る諸氏との出会いの場となった栃木「蔵の街」音楽祭（以下蔵音）の運営に熱中した。

最初の大仕事は第9回出演者の検分である。大平町のピアノ講師平本さん、青年会議所の黒川君と、出演希望のあったオーケストラ・シンポジオンを聴きにお茶の水のカザルスホールまで出かけたのだ。非常に生き生きとした演奏を行う団体で好印象だったため招聘を決めた。2004年から6年にかけて、シリーズコンサート「モーツァルトと行く！ヨーロッパ音楽都市周遊」を浜離宮朝日ホールとの共催で行うまでに成長したこのオーケストラも、蔵音が最初に招いた1997年当時は発足2年目のまだ若いオーケストラであった。

次の大仕事は、1998年の第10回と全国音楽祭サミットの同時開催である。

音楽祭のテーマは「新しい風」。栃木の特徴である古楽器を用い、かつ音楽史に新風を巻き起こした作曲家に焦点を当てようと、当時蔵音専門委員だった向江昭雅氏、御出演の桐山建志氏、諸岡範澄氏らのご指導を受けながら演目を決めて行った。そして、ルネサンス時代最高の音楽家ジョスカン・デ・プレ、協奏曲というジャンルを打ち立てたヴィヴァルディ、多感様式といわれる独特な世界を切り開いたC.Ph.E.バッハ、ヴァイオリン独奏曲に創意と工夫を凝らしたシュメルツァー、ビーバー、コレルリ、ルクレールら、そして、交響曲に、協奏曲にさまざまな革新をもたらしたベートーヴェンの作品によるプログラムが出来上がった。

三菱信託芸術文化財団のパーティーでは在阪の音楽評論家野口幸助氏からお褒めの言葉を頂戴し、期間中は東北から中部地方に至る各地から御参集の愛好家の皆様にご好評をいただいた。最終日のオーケストラ・シンポジオンによるベートーヴェンの「運命」「田園」初演時（1808年）の疑似再現という興味深い演奏会は、「守株」的に「もののけ」ブームの恩恵を受けた米良美一氏の歌曲の会を除けばおそらく蔵音史上最高の入場者675名をチケット半券を数えた実数で記録した。

しかし蔵音実行委員会は「第10回は盛り上がらなかった」と総括し、その「反省」に基づいて第11回以降が企画されることとなる。ところが、第10回時実数で1,833名だった入場者は、第11回時その4分の3、以降年々減り続け、2004年、第16回時は桜を入れても800名ほどだったと聞く。

富山市文化振興室の宮崎さんにもご講演いただいた全国音楽祭サミット栃木大会で具体的に議論された、地域における芸術文化事業の目的、手法を全く省みない形で事業が進められることに問題があると思う。

我国における文化経済学の泰斗でサミットにお招きした講師の一人池上惇京都大学名誉教授は、栃木の資料をフィンランドで開催された国際学会の発表に引用され、日本の芸術文化の現状を示すものとして注目されたという。

蔵音が受賞したサントリー地域文化賞の副賞の使い途を話し合ったとき、意義深い音楽祭サミット栃木大会の成果を書籍にまとめ、全国に発信したら栃木の名が高まろう、との意見もあったのだが、1年

に3、4日しか使わないチェンバロ、既に市文化会館が1台所有するチェンバロをもう1台購入することに決まった。

地域に多少なりとも貢献できれば、と参加した蔵音だったが、委員会の議論にはなんともついていけないものを感じたし、その上、あらぬ中傷まで聞こえるようになって、疎遠になってしまった。

だが、そこで出会った安田和信氏、オーケストラ・シンポジオンの指揮者・チェロ奏者諸岡範澄氏、夫人でヴィオラの涼子氏、ヴァイオリンの桐山建志氏との交流はその後深まることとなる。

蔵音から離れ、集めたCDでも聴いて暮らそうか、と思っていたところ、田沼町で内科を開業されている坪水敏夫先生から「一緒に弾きませんか」とアンサンブル参加のお誘いを受けた。もう長いこと楽器を出すこともなく、弦も指も錆び付いてご迷惑ではないか、と思ったのだが、先生の熱心な勧めに練習を見学に行くと、またうずうずとヴァイオリン弾きの虫がうごめきはじめた。そうして安蘇郡市医師会附属ストリングアンサンブル・スーペニール佐野のメンバーにいただいたのである。

佐野厚生総合病院在勤中は安蘇郡市医師会会員だったから問題ないが、下都賀郡市医師会に変わった時、どうなるかのご相談申し上げると、先生は、

「所属など関係ありませんから」

と、当然のようにおっしゃって下さり、今も週に1度の佐野通いが続いている。

先生とご一緒した第16回アマチュア室内楽フェスティバル（2003年1月・銀座王子ホール）も特筆すべき出来事である。全国90組570名の応募者から選ばれた18組が自慢の腕を披露するこの演奏会に、富山医科薬科大学室内合奏団の2年後輩で大学入学後チェロを始めた廣田弘毅君とその仲間、モルフェウス弦楽四重奏団が出演したのだ。今でこそ母校の麻醉科学助教授として活躍する廣田君だが、まだ高校生のような風貌で音階練習に余念がなかった頃から取り組んでいたポロディンの弦楽四重奏第2番の第1楽章を実に立派に演奏した。廣田君が20余年間弾き込んできた曲を聴きながら、当時を思い浮かべて深い感慨にとらわれた。

またぞろ私の中で虫がうごめき始めた。

2001年6月「地域で身近に古典音楽に親しもう」と下野楽遊という団体を設立し、小山市や藤岡町の喫茶店、館林市のレストランなどでサロンコンサートを開催してきたのだが、その頃ちょっと行き詰まっていた。それぞれの演奏会はヴァイオリンなら桐山建志氏、フォルテピアノは小倉貴久子氏、チェンバロの水永牧子氏、海外からはニコラウ・デ・フィゲイレド氏といったレコード芸術誌特選に輝く実力派ばかりを招いたから非常に印象深かったが、会としては何かが足りない。それは坪水先生や廣田君のような、年月を重ねて演奏していく姿ではないか。

下野楽遊に新たな展望が開けた。モーツァルトの頃がそうだったようにプロの音楽家とアマの愛好家が演奏を通して交流し好楽の和を広げる試みを行おう。蔵音以来の盟友で楽遊の同志でもある吉田公一氏、坪水先生、諸岡夫妻、桐山氏、フォルテピアノ開眼のきっかけを下さった伊藤深雪氏らに相談したところ、幸い御協力いただけることとなり、2003年12月下野楽遊奏楽塾が開設された。

準備してきたこととはいえ、父の急逝からわずか1ヶ月後のことで、吉田氏はじめ皆様ご心配下さったが、大きな衝撃から立ち直るためにも、打ち込むものがあつた方がよかつたように私は思っている。

佐野市の耳鼻科医斎藤裕夫先生、そして不肖私を含む塾生12名が集まり、奏楽塾が始まった。講師陣は手加減することなくご指導下さった。栃木市郊外星野の里へ節分草を見に行ったり、市内のお店で会食や買い物をしたり（栃木のデパート福田屋のカードを持っている講師もいる！）、地域との交流も深まった。

2004年9月12日栃木市文化会館で開催された第10回下野楽遊演奏会はその集大成である。1時間半の昼食休憩を挟むとはいえ6時間に及ぶ長い演奏会で、どうなることかと心配だったが、安田和信氏の名司会、講師陣の力演名演、優秀な裏方、そして熱心な塾生・会員の力で、一都四県からご参集の200

名ほどの皆様とともに「シューベルトとその時代」を偲ぶ音楽会を楽しむことができた。とりわけシューベルトが神学校時代に演奏したかも知れないモーツァルトのディヴェルティメントKV.136は富山時代からおなじみの曲だが、これまでになくよく響き、いい気分で演奏できた。諸岡講師にも「音楽的」と評され大変嬉しかった。

「人は生産を通してでなければ付き合へない。消費は人を孤独に陥れる」

学生時代、初めてこの警句を読んでから何度思い返したことだろう。1960年、福田恆存氏が論文「消費ブームを論ず」にこう記してから40数年が経つ。その意味するところは色褪せるどころかますます心すべきことになっているのではないだろうか。

私の音楽愛好がコンサートに出かけたり、音盤を集めて聴くだけの孤独な「消費」に留まらず、奏楽や演奏会開催といった「生産」を通して人と「付き合」っていけるようになったのは、ヴァイオリンと皆様のおかげである。

生産を通した付き合いは次々に出会いを生み出す。

第10回を聴いた会員の希望で2005年1月22日には歌曲によるサロンコンサートが決まった。松堂久美恵・小倉貴久子という豪華キャストでシューベルト、ベルク、R.シュトラウス、林光、武満徹らの作品をコーヒー片手に楽しむのだ。

奏楽塾の大演奏会はモーツァルト生誕250年の2006年。目下の態勢では、弦楽合奏とフォルテピアノに声楽くらの編成でないといろいろと厳しいので、選曲に条件が加わるが、ハンディを克服するのもしみみの内である。

満を持して挙げた一曲は、J.S.バッハの次男C.Ph.E.バッハ作曲のシンフォニアWq182-5。モーツァルトの支援者でもあるウィーン的好楽貴族ヴァン・スヴィーテン男爵の依頼で1773年に作られた曲だ。映画「アマデウス」の冒頭で使われたモーツァルトの交響曲第25番と同じ年の作品である。学生時代、聴いた瞬間虜になり譜面だけ買ってあったのだ。楽譜の綴じ金がすっかり錆びるほど昔のことである。この度ようやく陽の目を見る。ただ試奏の時、楽譜を一目見た諸岡講師は、

「本当にやるの？。激ムズ（過激に難しい）ですよ」

と驚きの声を上げたので、どうなりますことか。

ベートーヴェンの第9のテーマに似た節の出ってくるモーツァルトのオッフエルトリウム「主のお憐みを」KV.222、リート的な教会様式の巧緻を極めた作品というグラドゥアーレ“Sancta Maria, Mater Dei” KV.273はいずれも6、7分の短い曲で、安田先生に相談したら編成も混声合唱と弦楽合奏、総譜もあるという。パート譜をつくる手間が必要だが、これはできそうだ。

よろしかったら下野楽遊の演奏会にお出かけ下さい。歌でも器楽でもご一緒に演奏もいかがですか？



子供たちとともに